トヨタ財団地域社会プログラムニュースレター［ジョイント］
October 2007

Join人

Vol. 1

特集 生まれ変わるまち

商店街・やど街・温泉街

みなさんがお住まいの地域は、今どんな課題を抱えているでしょうか。高齢化？　市街地の空洞化？　多様な背景をもつ住民同士の共生の課題……？

そうした数々のテーマを他の地域の方々と共有し、一緒に考えていく場となればという願いから、このささやかなニュースレターは生まれました。身近なコミュニティを大切に思い、日々のくらしを実践していらっしゃる方々の手で、ともに育てていってくだされば幸いです。

誌名の「JOIN人」は、「参加」や人と人との「接点」「協力」の意味をこめて名づけました。地域社会の再生へ向けた試みには、ときに大きなエネルギーが必要になるかもしれません。小誌は今日から、みなさんの「一念発起」を応援すると同時に、情報交換、相互交流の道具としてもお役に立ちたいと思っています。貴重な知恵や経験をぜひお寄せください。

いずれも、歴史のあるまちです。
戦後の混乱期からずっと庶民の台所を担ってきた、
熊本市・子飼商店街。
高度成長を支えた労働者の簡易宿泊街だった、
横浜市・寿町。
昭和の団体旅行ブームの花形温泉街、開湯二三〇〇年の、
松本市・浅間温泉。
時代が変わるにつれ、まちも変化を迫られます。
新たな役割を模索している、三つの試みを取材しました。

TOPICS ～イベント案内～

“風”をはこぶ学習会「障害者の人権侵害について」

2007年12月2日（日）14:00～17:00、茨城県ひたちなか市「ホテルニュー白亜紀」にて。
斎藤悟氏「国際生活機能分類（ICF）について」、東俊裕氏「障害者の権利条約と差別禁止法」。参加費500円。主催：社会福祉法人光風会ほか。お問い合わせ：NPO法人茨城県精神障害地域ケアー研究会（TEL/FAX：029-244-2623）。

おきなわ時間美術館

ローカルな沖縄文化と「アジア」をキーワードに、食あり、音楽あり、そしてもちろん美術ありの全感覚開放型の美術館を創出。
2007年11月4日（日）まで。那覇市栄町市場内古民家にて。一部有料。主催：特定非営利活動法人アーツイニシアティブトウキョウ（AIT／エイト）、特定非営利活動法人前島アートセンター。お問い合わせ：AIT（TEL：03-5489-7277）

桑取・月満夜の集い～冬～「雪上の月光浴ツアー」

スノーシューをはいて冬の森の中でゆっくりと過ごしてみませんか、月光に癒されてみませんか。
2008年2月2日（金）、23日（土）、24日（日）、3月21日（金）、22日（土）、23日（日）、くわどり湯ったり村「癒しの森」にて。対象：一般（高校生以下は、保護者同伴）。参加費3,000円。申し込み締切：実施日10日前まで。
お問い合わせ：NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部（TEL/FAX：025-541-2602、e-mail：kamiechigo@nifty.com）。
かみえちご山里ファン倶楽部では、この他新潟県上越市においてさまざまなイベントを開催しています。詳しくは、同会ホームページhttp://homepage3.nifty.com/kamiechigoに掲載されています。

活弁映画会

活動弁士・坂本頼光さんをお迎えして活弁映画会を開催します。2008年1月13日（日）千駄木、「けんこう蔵部」にて。時間は、未定。主催：NPO法人映画保存協会。詳細は、同会ホームページhttp://www.filmpres.org/およびメルマガにて後日発表。お問い合わせ：NPO法人映画保存協会（TEL：03-3823-7631日曜または、火曜11:00～17:30までもしくは、e-mail：info@filmpres.org）

山本敏晴講演会

2008年2月9日（土）14:00～15:30、名古屋市男女平等参画推進センター（つながれっとNAGOYA）にて。託児あり。
NPO法人宇宙船地球号山本敏晴さんの講演会および新作を含めたこれまでの著書に関するブックトーク。参加費500円。お問い合わせ：NPO法人参画プラネット（TEL：052-249-7277/FAX：052-249-7278、ホームページhttp://sankakudo.net）

読者のみなさまからの情報をお待ちしています。スペースの関係で、毎号すべてを掲載することはできませんがご了承ください。

2007年度 地域社会プログラム公募案内
応募締切は11月20日です

トヨタ財団「地域社会プログラム」では、「地域社会の再構築と活性化を目指して―支え合うくらしといのち―」をテーマに、以下の助成を行います。地域にくらす人々が、身近にある資源や人的なネットワークを活用しながら、地域の課題を解決することを通して、互いのくらしやいのちを支えあい、育むことのできる社会をつくりだすことをねらいとしています。

1「活動助成」
地域社会の再構築と活性化を目指し、地域にくらす人々が主体となった持続的な実践プロジェクトへの助成（一件あたりの上限二〇〇万円）

2「成果普及助成」
(A)「活動記録の出版」
地域社会の再構築と活性化を目指した活動の具体的な成果を、他の地域で類似な実践をしている人たちと比較、共有することを目的とした出版への助成（一件あたりの上限一〇〇万円）
(B)「広域ネットワーク」
地域社会の再構築と活性化を目指した活動の経験を、いくつかの地域間で共有し、具体的な問題解決に資する、地域間の協働と連携を支える地域を越えたネットワークへの助成（一件あたりの上限四〇〇万円）

3「特定課題」
(1)「離島助成」
地域社会の崩壊が、より深刻な問題となって現出していると考えられる、離島（北海道、本州、四国、九州以外の島）における持続的な実践プロジェクトへの助成（一件あたりの上限二〇〇万円）
(2)「ユース助成」
地域社会の再構築において欠かせないと思われる、若者の参加を促進することを目的に、高校生が主体となったグループによる実践活動への助成（一件あたり五〇万円）

なお、「活動助成」、「成果普及助成」については、「地域社会の再構築に向けて、より緊急な対応が必要と判断する地域」を「助成重点区」と設定し、より重点的な支援を行います。本年度は、「九州」、「四国」が対象となります。

助成総額は一億円。二〇〇八年四月から二〇〇九年三月までの一年間に実施される事業が対象。応募の締め切りは二〇〇七年二月二〇日（当日消印有効）。二〇〇八年三月までに選考委員会（委員長・姜尚中東京大学教授）が選考します。

応募先と問い合わせ
〒163―0437 東京都新宿区西新宿2―1―1新宿三井ビル37階
私書箱236、財団法人トヨタ財団「地域社会プログラム」係。電話03（3344）1701。
応募要項はトヨタ財団のホームページ（http://www.toyotafound.or.jp）で閲覧できます。

Join人［ジョイント］創刊号
2007年10月25日発行
発行者　財団法人トヨタ財団
163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1新宿三井ビル37階
TEL：03-3344-1701　FAX：03-3342-6911
http://www.toyotafound.or.jp
e-mail:gp4ca@toyotafound.or.jp
編集人　田中恭一
デザイン　中井俊明

編集後記

「地域社会プログラム」の担当セクションから、「地域づくり」を行う人たちを応援するニュースレターを発行しよう、という話が持ち上がったのが今年5月でした。私たちの当初いだいた思いが、多くのご協力を得ることで「Join人［ジョイント］」の創刊につながりました。取材協力をいただいた関係者の方々、また、原稿あるいは情報をお寄せいただいたみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。現地取材はいずれも記録的猛暑の中で行うこととなりました。取材記者、編集、そして同僚スタッフによる、文字どおり「汗の結晶」？かと思います。今後ともご愛読いただければ幸いです。（T）

生まれ変わるまち 01

熊本版「おばあちゃんの原宿」が発信する商店街文化

熊本市 子飼（こかい）商店街 子飼商店街振興組合

商店街を「学び」と「コミュニケーション」の場に

子飼商店街は、市街の中心地から東北へ二キロ、白川のほとり、藤崎八幡宮に近い一角にある。魚屋、八百屋、果物屋、衣料品店や雑貨店といった生活必需品の店が、ほんの五〇〇メートルほどの通りに軒を連ね、年の暮れには熊本市民がお正月の買い物に訪れる場所。近隣に住むお年寄りが、ごはんの材料を買い求めにくる、熊本版「おばあちゃんの原宿」だ。

しかし、戦後の闇市から続く子飼は、歴史のある商店街ならではの問題をかかえていた。客がスーパーやコンビニに流れてしまう。固定客である「おばあちゃん」たちは高齢化が進み、買い物に出てくるのもおっくうに。

そんな中、〈子飼商店街振興組合〉が二〇〇四年度の地域社会プログラムに応募したプロジェクトが、「『学びを支援する』商店街への変身」だ。

「商店街を、ただ『モノを売る空間』と考えるのではなく、『交流の場』『知的経験を得る学習の場』と捉えなおすことで、子飼商店街にしかない魅力を、消費者に支持してもらえるようになるのではないか」（知価創造実験室〈子飼ラボ〉主宰・前田芳男さん）

もともと小・中学生の体験学習の受け入れに熱心だった子飼には、年間、約二〇〇〇人の子どもたちが、県内五〇校から訪れる。しかし、若い教師自身、スーパーでの買い物しか知らず、商店街の魅力を知らない世代。そのため、近年、体験学習はただの「遠足」になりがちだった。振興組合では、「商店街の意味」、「商店街でなにを学ぶことができるのか」を明確にし、助成を資金に「総合的学習用教材」を作成、学校に配布するなどして、「学びの場としての商店街」づくりを進めた。

商店街で「のら猫問題」にも取り組む。月一回、動物愛護センターが獣医師を派遣。住民みんなの相談窓口に。

恒例行事、中学生の体験学習。「どう料理するの？」お客さんの質問に答えられるよう、事前学習もする。

「台所」から「サロン」へ 「通学路」から「研究拠点」へ

重要な固定客「おばあちゃんたち」にも「台所」以外の魅力を、とスタートしたのが、熊本大学子飼サテライトによる、「音楽療法」だ。

「療法というとおおげさですが、要はお買い物がてら寄って、歌うことで心身活性化をしていただく。毎週火曜日の午前中に、来るもの拒まずで続けています。いつも一七人くらいの、性別も年齢もいろいろな方が集まります。今回で五一回目。年二回コミュニティセンターで催されるコンサートも、イベントとして定着してきました」（熊本大学文学部・木村博子准教授）

この日集まったメンバーは、「われは海の子」「宗谷岬」など懐かしい歌を合唱した。自分たちで好きな歌を選ぶ。のど自慢メンバーによる「肥後節」独唱や、「おしりかじり虫」のような最新のヒット曲が入ることも。

子飼商店街は、熊本大学の学生たちの「通学路」でもある。自転車で通り抜ける学生をどう取り込み、商店街の活性化につなげるかも、課題だった。

「閉じこもりがちのお年寄りに出てきてもらうためのきっかけづくりである一方、学生や研究者にとってはフィールドワークの場にもなりました。地域音楽文化の情報収集に役立っているのです」（前出・木村准教授）

「音楽療法」に集うみなさん。常連さんも、初めての人も、みんないっしょに大きな声を出す。笑い声と歌声が絶えない、にぎやかな場所。「ここに来るようになって、生活にハリが出た」「忘れていた歌を思い出す」という人も。

守りながら、創造していく 新しい「商店街文化」

「わたしたちの商売は、スーパーや量販店とは違う。おばあちゃんが商店街に出てきたら、『医者には行きよっと？調子はどう？』なんて二〇分話して、『それば、一個もろうて帰ろう』というような、ゆったりしたものです。どんなに値段を安くしても、すいか一個まるごとは売れない。食べるのはひとり暮らしの老人ですから。けっして効率のいい商売じゃないが、いま、それをやってるところはもう他にない。中学生の体験学習も、うち（新宅商店）では『辛子蓮根』の辛子詰めを手伝わせますから、郷土の伝統食の作り方を勉強できます。この、ここにしかない『商店街文化』を見に、県内、天草からでも子どもたちが来ますよ。『文化保護』をまちづくりの中心に据えたことで、活性化の鍵が見えてきました」（振興組合・新宅咲雄理事長）

積極的な姿勢が評価されて、行政支援も受けられるように。「子飼にはなにかある」というイメージも広まり、懸案だった空き店舗も、若い人たちの出店で埋まった。商店街の試みは、再生への道筋をつけたといえそうだ。

「高齢化が進むいま、買う人が少ない、買う量も少ないという現状は変えられない。だから、地域の特産品である大豆を使って、子飼の人気パン屋さんで新しいパンを開発してもらうなど、『新名物づくり』にも取り組んでいます。これらをインターネット販売のような、別の流通にのせて、全国発信ができれば」（前出・前田さん）

子飼商店街はまた、新たな課題に挑戦しようとしている。

商店街学習の小・中学生向け教材を製作した前田芳男さん。この日も、地元の小学校の先生たちが打ち合わせに訪れていた。

子どもたちに大人気。上妻（こうづま）食料品店のおやじさん。「挨拶の仕方とか、親が言うような事は、教えとっとよ」（笑）

生まれ変わるまち 02

支えあうおれたちのまち。みんなの気持ちが寿を変え始めた

――横浜市 寿町 NPO法人 さなぎ達

ひとり暮らしが長い高齢者の中には、介護を嫌がる人もいる。「毎日が戦い。だけど、それも楽しむことにしてる」と保田さん。

五〇過ぎ、学校の楽しさ知った病気をのりこえヘルパーに

保田正行さんは五五歳。横浜市中区寿町で介護の仕事をしている。

「二年半前、寿町にたどり着いたときは、うつと不整脈、甲状腺疾患、肝炎の再発と、体中ぼろぼろだったんです。生活保護を受けて自立支援施設〈はまかぜ〉にいたけど、とても働ける状態じゃない。一ヵ月入院して、その後も〈ポーラのクリニック〉に半年通いました。だけど、うつ状態で、なにもする気になりませんでした」

心身ともに疲れ果てていた保田さんだったが、〈はまかぜ〉の清掃などの作業療法から少しずつ社会復帰を始め、〈ポーラのクリニック〉の山中先生の励ましもあって、昨年一〇月「ヘルパー二級養成講座」を受講した。

「通信課程を終えると一ヵ月のスクーリング。五〇歳過ぎて、学校の楽しさを味わいましたよ。二回り年下の女の子たちが同級生なんだから（笑）。学校へ行く気になるまで、失ったやる気を取り戻すまでが、しんどかった」

現在は、民間の会社に登録し、週三日、午前と午後の二回ずつ、高齢の寿生活者の訪問介護にあたっている。

プランターが置かれるようになり、ゴミの不法投業も減った。

単身生活者を結ぶ擬似家族的ネットワーク

〈ポーラのクリニック〉の山中先生とは、NPO法人〈さなぎ達〉理事長、山中修院長。〈さなぎ達〉の、二〇〇四年度地域社会プログラムで助成を受けたプロジェクトは、『『寿緑化』と『ヘルパー養成』を通じたメンタルケアおよび福祉就労・ジョブトレーニングの場の創出』だった。

「寿町はまちに不思議な魅力があるんです。人もおもしろい。まち全体がファミリーみたいな空気をつくりたい」と櫻井さん。

「横浜・寿町は高度成長期に日雇い労働者のドヤ街として発展しました。しかし、産業構造の変化もあり、現在このまちで生きる人は、生活保護を受けている単身高齢者がほとんどです。ホームレスや、それに近い人々も多い。衣食住を失っているだけでなく、家族もなく、生きる希望を失いかけている。寿の人たちと信頼関係を築いていく中で知ったのは、そのことでした」（〈さなぎ達〉事務局長・櫻井武磨さん）

「うつになったきっかけは、両親を相次いで亡くしたことでした。その後病気が重なって、生きる意欲を失くした。介護の仕事の魅力は、人との触れ合いがあること。正直、利用者のじいさんのところへ行っても、『なにしに来た？帰れ』って言われたりする。一〇回に一回『ありがとう』が聞ければいいほうです。だけど、親父を介護しながらおふくろが倒れたのを見ているし、そのとき訪問看護師の人にお世話になったのを思い出して。親孝行できなかった分を仕事で返したいって気持ちも、どっかにあります」（前出・保田さん）

他人と関わらずに生きている人々を、擬似家族的なネットワークで結んでいくことができれば、と櫻井さんは言う。

「『寿緑化』も、木や花を植えること自体が目的ではなくて、その作業がコミュニケーションのきっかけになればと。あるいは毎日、花に水をやることで、楽しみを見つけてもらえればという思いがあります」（前出・櫻井さん）

殺風景だった簡易宿泊街のあちこちにプランターが並ぶ。鉢を置いたら自然に、水遣りをする人が現れたという。

「おれたちのまち」が生み出すことぶき発ビジネスの今後

「介護は人の命と関わるから、こっちも命賭け。いまは、ぼくも一生の仕事だと思ってます」（保田さん）

寿から巣立ったヘルパーは約二〇人。しかし、その全員が、保田さんのように働いているとは限らない。

「このまちに介護事業は絶対必要なものです。それだけにビジネスとしての競争も激しい。現実の壁にぶつかって辞めてしまう人もいます。わたしたちは、寿生活者が関われる仕事の選択肢を少しずつ広げて、人と人を結びつける事業を、これからも展開していきたいと思っています」（櫻井さん）

〈さなぎ達〉の活動は多岐にわたる。安く栄養価の高い食事を提供する〈さなぎ食堂〉。簡易宿泊施設の空き部屋をバックパッカー向けの安宿として提供する〈ヨコハマ・ホステル・ヴィレッジ〉とも提携する。寿町発のベンチャービジネスとして育てるのが願いだ。

「寿が変わりつつある。だんだん、『おれたちのまち』って感じになってきた」。そう語る保田さんの言葉の中に、寿の未来が見えてくる。

利用者の間でおいしいと評判の〈さなぎの食堂〉。バランスのいい食事を昼、夜、二回。市と〈さなぎ達〉が協力、ローソンが一部の食材を提供して運営している。

〈ヨコハマ・ホステル・ヴィレッジ〉は、寿町にある約 110軒の簡易宿泊所をバックパッカーに紹介。外国人利用者も多い。

生まれ変わるまち 03

開湯一三〇〇年の温泉街が「共生のまち」として活気づく

――松本市 浅間温泉 NPO法人 ケアタウン浅間温泉

豊富な温泉資源を生かしたケアタウン構想

日本書紀にも登場するという浅間温泉の奥深く、江戸時代は信州・松本城主の別邸だった老舗旅館。滾々と涌き出るお湯は、源泉かけ流し――。松本市にある〈御殿の湯〉は、このぜいたくな温泉宿を居抜きで使った、画期的なデイケア施設として話題を呼んだ。二〇〇三年のオープン以来、利用希望者は増えるばかり。定員一八名はつねにいっぱいで、二年待ちの人もいるという。

「日本家屋の老舗旅館ですから、階段もありますし、新しいバリアフリーの建物とくらべると不便なところも多いです。でも、利用者はみな、そういう建物で暮らしてきた方々なので、かえってほっとするとおっしゃいます」（〈御殿の湯〉坂槙裕子さん）

廃業した温泉旅館を有効利用して、高齢者や障害者にやさしいまちづくりをめざす浅間温泉〈ケアタウン〉構想の、大きな成功例といえるだろう。

浅間温泉はかつて、信州の五大温泉地に数えられたほどの名湯だ。昭和三〇年代には旅行ブームにのって大型旅館の建設も進み、団体客を多く迎えたが、昭和六〇年代のペンションブームあたりから、苦しい時代に入った。後継者は不足し、施設は老朽化する一方だが、業績不振のため再投資が厳しい、といった現実が露呈して、まち全体が大きな転換を迫られている。

打開策として、豊かな温泉資源を生かした、二一世紀型のまちのあり方を模索できないか、と考えられたのが、浅間温泉の〈ケアタウン〉構想だ。

〈御殿の湯〉は自立した利用者が多い。レクリエーションや作業も利用者がやりたいことを提案する。お風呂は午前も午後も、好きなときに利用できる。それも魅力。

信州の奥座敷・浅間温泉は、北アルプスの美しい山並みを望める、すばらしい立地。

機織りとおやきでまちおこし〈アトリエMOO〉が始動

「障害者機織り授産施設による、温泉街の街並み保存と空き店舗による賑わいの創出」は、NPO法人〈ケアタウン浅間温泉〉による、二〇〇五年度地域社会プログラムへの応募プロジェクト。今年四月、この活動のメンバーである〈アトリエMOO〉が、松本市から正式に障害者自立支援法の「地域活動支援センターⅡ型（創作型障害者デイサービス）」として認定を受けた。〈御殿の湯〉と同じく、空いた温泉旅館の建物を使うことで、街並み保存、活性化につなげる狙い。当初予定していた土蔵造りの建物とは条件面で折り合いがつかなかったが、浅間温泉の別の旅館を借りて開設し、機織り他、オリジナル商品作りにも力を入れる。

「裂織（さきおり）織」といって、浴衣などを裂いて作った紐で機を織り、雑貨も作っています。機織り作業所の運営のほかに、販売事業も。織物のほか、長野県独特の食文化、おやきも販売します。じゃがベーコンなど餡を工夫してオリジナル商品を八種類作りました。いまはまだ地元の人たちに食べてもらうのがせいいっぱいですが、浅間温泉内では人気の品です（笑）。通信販売も始めたのですが、人手が足りないのが悩み。ゆくゆくはネット通販を考えています」（〈アトリエMOO〉代表・福井佳代子さん）

〈アトリエMOO〉はもともと、障害児を持つお母さんたちが立ち上げたグループ。福井さんたちがめざすのは、将来にわたって、子どもたちが安定した職場を持ち、自立して生きていける環境をつくることだ。

「だからぜひ、温泉街のみなさんの協力を得て、まちづくりに貢献したい。商品も、浅間温泉の『顔』になれるものをと思っています」（福井さん）

共生のまち・浅間温泉を今後どう発展させるか

二一世紀型、福祉の未来を見据えた〈ケアタウン〉。この新しい試みは、温泉街を少しずつ変えつつある。

「『食・温泉・健康』この三つが、これからの浅間温泉のキーワード。お湯と成人病予防食をセットにした健康プランなども考えています。信州を旅行される方にも、たとえば介護の必要な両親といっしょに二、三泊して、お年寄りをケア施設に預け、若い人は上高地へ遊びに行く、そんな使い方をしてもらえるのではないか。それを目標に、地元のドクターと連携したり、公共の場でのバリアフリーを徹底させるなど、まちぐるみで、方針を立てていく段階にあると思っています」と、温泉街活性化のため、〈ケアタウン〉構想に協力する旅館組合理事長・山本浩司さん。

街並みの保存も課題だが、街灯や足湯の設置、植樹など、賑わいを取り戻すための工夫が、浅間温泉街づくり協議会を中心に提案されている。

「まちのランドマーク〈ホットプラザ浅間温泉〉は、市の温泉施設ですが、二年後に改修を予定し、旅館組合が運営も委託されることになります。地域住民が先頭に立ち、新しい浅間温泉の価値を創っていきたい」（山本さん）

浅間温泉再生へ。〈ケアタウン〉構想はスタートを切った。

〈アトリエMOO〉では、利用者やその家族が和気藹々と作業を。旅館を借りているせいか、なごやかで、くつろいだ雰囲気。

人気のおやきは、イースト菌を使ったオリジナルレシピに秘密が。

万葉集にも「浅葉の湯」「麻葉の湯」などの言葉が記されている、開湯一三〇〇年の名湯。泉質もよく、澄んだ、まろやかなお湯だ。四季折々の庭が眺められるお風呂は〈御殿の湯〉の目玉。これを楽しみに利用者が集まる。

「温泉地再生事業に対しての、県と市からの援助も決まった。ここ二、三年で浅間温泉は変わりますよ」と山本浩司さん。

筆者紹介

中島京子

東京都出身、作家。著書に『自然と環境に関わる仕事』（主婦の友社）など。最新刊は『冠・婚・葬・祭』（筑摩書房）。

地域づくりは人づくりなのです

――姜尚中（かん さんじゅん）さん

（地域社会プログラム選考委員長・東京大学教授）

語呂合わせのようですが、地域再生のキーワードは「若者、よそ者、ばか者」だと、元三重県知事の北川正恭さんと話したことがあります。「若者」は文字通り。あとの二つは説明が必要ですね。

「よそ者」というのは、地域社会に外の空気を持ち込む人のこと。プログラムのひとつの柱、「地域の開放性」につながる考え方です。

「ばか者」の意味は、すぐに回答や効果が発見できなくても、愛着や問題意識を持って、愚直にコミットしていく人材を指します。

これからの社会に求められるのは、企業誘致のような従来型ではなく、地域の独自性を生かした内発的な発展です。それには、「若者、よそ者、ばか者」の三位一体が必要ではないかと思われるのです。

特集でとりあげた三つの地域は、かつては賑わいを見せたにもかかわらず、少子高齢化や人口の流出など、現代社会に典型的な問題を抱え、いま、活気を取り戻そうと努力しています。しかも、活性化の担い手として、社会的な勝者・強者ではない人たちにかかわってもらおうという発想が共通しています。これは、とても勇気のいることですし、ユニークだと評価して助成の対象にしました。

それぞれの試みを見ていくと、たとえば、子飼商店街は子どもたちや大学生といった「若者」を取り込んでいますし、松本市の別の地域から移り住んで浅間温泉に拠点を持った〈アトリエMOO〉などは「よそ者」の良さを持ち込んだといえるかもしれません。寿町はもともと、「よそから来た人たち」のまちですが、ここには新しいネットワークが立ち上がりつつあります。「種は蒔かれた」という思いがしました。

これが根づき、芽が出て成長していくためには、それなりの時間がかかるでしょう。そこで大切になるのは、長いスパンで着実に続けていく、「ばか者」の姿勢だと思います。

今回、ニュースレターの創刊を機に考えたのは、財団と助成対象者の関係に双方向性を持たせたいということでした。また、助成対象者同士の相互交流を深めること。そして、地域社会プログラムを一般の人に広く知ってほしいという思いもあります。地域の取り組みを、長期的に見守り、情報交換し、応援し合うような場に「Ｊｏｉｎ人」がなっていくことを期待しています。

地域再生に即効的な対策は、ありません。なぜなら地域づくりは「人づくり」、そのまちをつくる人材を呼び込み、育てることだからです。お金やモノをつくるのとは違い、手間ひまがかかります。しかし、そのぶん、他では得られない喜び、大きなやりがいがあるはずです。地域社会プログラムでは、そこを理解して、一押し、二押ししていきたい。

この秋、また来年度の募集がありますが、「人づくり」にウェイトを置いて、種を蒔いていこうとする人たちを応援したいと思っています。

ただいま奮闘中 その1

2006年度より新たに「離島助成」「ユース助成」が始まりました。第1回の助成が決定したプロジェクトのなかから、ホットな活動たけなわの1グループずつにお願いして、みなさんへのメッセージをいただきました。

ユース助成

仲間と始めた公園の清掃活動からピースカフェへ

「出会い」

特定非営利活動法人 HPS国際ボランティア
前・副理事長（広島大学附属高校二年）
松下 英樹

僕がＮＰＯ活動に携わるきっかけとなったのは、佐藤理事長との出会いでした。もともと、ボランティアサークルを立ち上げ、自主的に平和公園の清掃ボランティアをしていたところが理事長の目に留まり、そこから一緒にＮＰＯ法人を立ち上げたのです。まさに、理事長との「出会い」があって、いまの活動があると言っても過言ではありません。

広島・平和公園のクリーンボランティア。この日は小さな子どもから年配の方まで約40人が集まった。広い公園内を手分けして清掃する。松下さんがてきぱきと指示を出す。

私たちは、広島平和記念公園及びその周辺地域の活性化、また自分たちと同世代の若者の平和に対する意識向上を目的とし、昨年の一〇月から広島平和公園で定期的にテント式オープンカフェ「Peace Cafe」（トヨタ財団助成事業）を開いています。カフェは木々が生い茂る水辺に位置し、訪れる人の心を緑が癒します。カフェで皆様にお出しするのは、ピースウインズ・ジャパンの東ティモール産フェアトレードコーヒーで、香りがよく、大変美味しいと評判です。憩いの場として平和公園を訪れる市民や国内外からの観光客、清掃ボランティアに参加するボランティアの皆様方と国境や世代を越え、さまざまな人たちが集い、たくさんの「出会い」が生まれます。私たちは、この「出会い」が平和の輪が広がるきっかけとなることを期待している

「出会い」は新たな可能性につながります。

のです。

カフェの役割はというと実にさまざまで、休憩場所としてコーヒーを提供することはもちろん、市民や観光客の交流の場としての役割や道案内などのインフォメーションセンターとしての役割などもあります。広島にお越しの際はぜひお立ち寄りください。

また、普段は理事長を筆頭に各方面の協力を賜り、平和推進事業を手がけています。軸となっている広島市民平和の集いは、今年も八月五日に平和公園の中にある国際会議場で催しました。当日は一〇〇〇人以上の方々が集まり、著名人による平和のビデオメッセージの上映や原爆創作劇披露などが行われました。この集いは継続的に実施され今回で一五回目になります。その間、

清掃を終えてカフェでひと息。淹れているコーヒーはフェアトレードの逸品だ。今日の担当は浅野さん（左）と濱﨑さんの 2人。

どれほどたくさんの「出会い」があったことでしょう。

「出会い」は新たな可能性を見出します。地域社会の交流が希薄化し、再構築が叫ばれる中で、まず私たちは「出会い」を求めてゆくことが大切だとNPO活動を通じて思うようになりました。「出会い」があって初めてお互いを支え合うことにつながります。「出会い」がなければなにも始まりません。そう考えると「出会い」が私たちのくらしといのちを支えているのかもしれません。

ただいま奮闘中 その2

離島助成

伝統の麻織物、宮古上布の糸績み復活をめざして

特定非営利活動法人 マーズ 理事長
下地 克子

私たちの住む先島諸島は、沖縄本島の南西三〇〇キロメートルの洋上に散在する大小八つの島々からなっています。美しい海に浮かぶ島ですが、経済状況は厳しく、サトウキビ、葉タバコ栽培やかつてにぎわいをみせたカツオ漁なども、今は元気とはいえません。

宮古島の自慢は、なんといっても青い海と個性的な文化です。このかけがえのない自然と文化をどう受け継ぎ、島の発展とバランスをとっていくかが今後の課題だと思われます。

そのなかで、私たちが責任をもって次世代へ渡さなければならない宝物のひとつが、宮古上布です。宮古上布は、原材料に手績みの苧麻（宮古の言葉ではブーといいます）糸のみを使う伝統の織物で、国の重要無形文化財に指定されています。琉球王に島民が献上してから知られるようになり、それから四〇〇年の時を経た今も、宮古島で織りつづけられています。藍染めの糸の濃淡で精緻な文様を織り出すその技術は驚くべきもので、きわめて貴重な織物として取引されています。しかし、その命である苧麻糸の生産は年々減ってきてしまいました。糸の紡ぎ手の高齢化も深刻な問題といえます。

そこで、こうした課題の解決に少しでも近づこうと、いま私たちのプロジェクトでは、苧麻の栽培、手績み技術者養成などの活動に取り組んでいます。

まずは、もともとよい糸の産地だったにもかかわらず生産が途絶えてしまっている宮古島の狩俣地区と池間島での手績み復活を目標に教室を始めました。子供の頃に糸作りが身近にあった方も多く、初めてと思えないくらい細くきれいな糸を作る人に出会えたことは、うれしい驚きでした。教室に来たみなさんが原料繊維である生ブーの束を手にとり、より裂きやすいものをと一生懸命に選んでいる姿を見ると、この熱心さに報いるためにも良質の苧麻をたくさん栽培できるよう努力をしなければと感じます。

いずれは糸原料の島内自給を果たしたいと考えていますが、現状では最適な耕作方法も定かでないため、土壌や肥料のやり方などの実験から始めなければなりません。今年は六月に、青芯種（青ブー）、赤芯種（赤ブー）の苧麻、計七〇株を植え付けました。よい繊維が採れるようになるまでには数年かかることでしょう。

手仕事のすばらしさ、藍色の糸の滑らかな美しさ、織り上げられた上布の輝きを誇りに思うとともに、自然のぬくもりを宿した美ら布を、島の人々と一緒にずっと生み続けていくことを願っています。

糸績みの作業。よい繊維を選んで爪の先などでできるだけ細く裂く。これを撚り合わせたものが宮古上布の原料糸になる。

苧麻を刈り取り、葉を取り去り表皮を削いでから、表面をしごいで水洗いする。緑色の繊維が糸の原料「生ブー」。

宮古の織物で仕立てた藍色のドレスを身につけた下地克子さん。地域社会プログラム贈呈式でのひとこま。

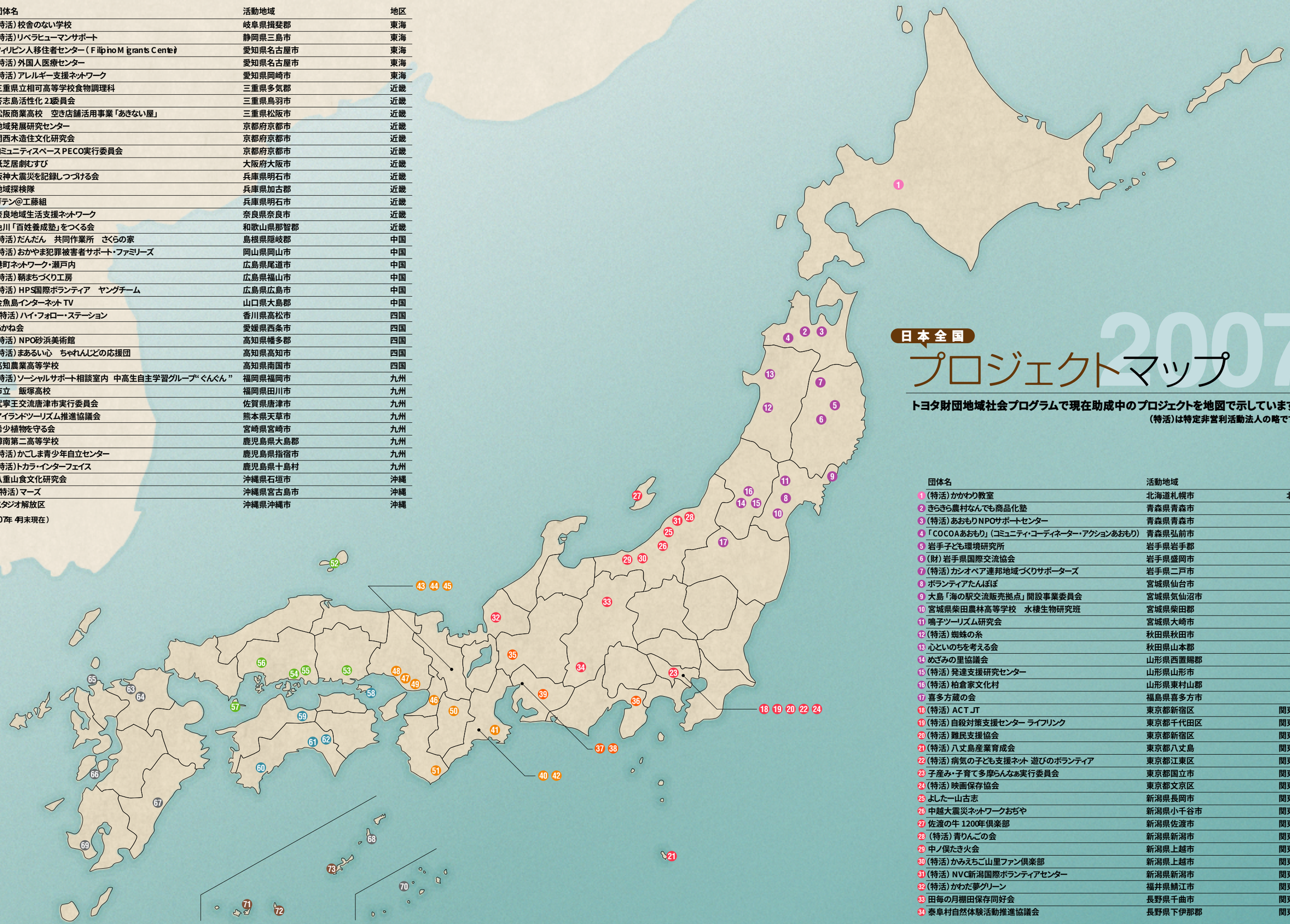
織り上がった宮古上布からつくられた絣の着物。独特の模様が上品で美しい。

手績み技術者養成などの
活動に取り組んでいます。

日本全国

プロジェクトマップ 2007

トヨタ財団地域社会プログラムで現在助成中のプロジェクトを地図で示しています。
（特活）は特定非営利活動法人の略です。



	団体名	活動地域	地区
1	（特活）かかわり教室	北海道札幌市	北海道
2	きらきら農村なんでも商品化塾	青森県青森市	東北
3	（特活）あおもりNPOサポートセンター	青森県青森市	東北
4	「COCOAあおもり」（コミュニティ・コーディネーター・アクションあおもり）	青森県弘前市	東北
5	岩手子ども環境研究所	岩手県岩手郡	東北
6	（財）岩手県国際交流協会	岩手県盛岡市	東北
7	（特活）カシオペア連邦地域づくりサポーターズ	岩手県二戸市	東北
8	ボランティアたんぽぽ	宮城県仙台市	東北
9	大島「海の駅交流販売拠点」開設事業委員会	宮城県気仙沼市	東北
10	宮城県柴田農林高等学校　水棲生物研究班	宮城県柴田郡	東北
11	鳴子ツーリズム研究会	宮城県大崎市	東北
12	（特活）蜘蛛の糸	秋田県秋田市	東北
13	心といのちを考える会	秋田県山本郡	東北
14	めざみの里協議会	山形県西置賜郡	東北
15	（特活）発達支援研究センター	山形県山形市	東北
16	（特活）柏倉家文化村	山形県東村山郡	東北
17	喜多方蔵の会	福島県喜多方市	東北
18	（特活）ACT JT	東京都新宿区	関東甲信越
19	（特活）自殺対策支援センター ライフリンク	東京都千代田区	関東甲信越
20	（特活）難民支援協会	東京都新宿区	関東甲信越
21	（特活）八丈島産業育成会	東京都八丈島	関東甲信越
22	（特活）病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア	東京都江東区	関東甲信越
23	子産み・子育て多摩らんなぁ実行委員会	東京都国立市	関東甲信越
24	（特活）映画保存協会	東京都文京区	関東甲信越
25	よしたー山古志	新潟県長岡市	関東甲信越
26	中越大震災ネットワークおぢや	新潟県小千谷市	関東甲信越
27	佐渡の牛 1200年倶楽部	新潟県佐渡市	関東甲信越
28	（特活）青りんごの会	新潟県新潟市	関東甲信越
29	中ノ俣たき火会	新潟県上越市	関東甲信越
30	（特活）かみえちご山里ファン倶楽部	新潟県上越市	関東甲信越
31	（特活）NVC新潟国際ボランティアセンター	新潟県新潟市	関東甲信越
32	（特活）かわだ夢グリーン	福井県鯖江市	関東甲信越
33	田毎の月棚田保存同好会	長野県千曲市	関東甲信越
34	泰阜村自然体験活動推進協議会	長野県下伊那郡	関東甲信越

	団体名	活動地域	地区
35	（特活）校舎のない学校	岐阜県揖斐郡	東海
36	（特活）リベラヒューマンサポート	静岡県三島市	東海
37	フィリピン人移住者センター（Filipino Migrants Center）	愛知県名古屋市	東海
38	（特活）外国人医療センター	愛知県名古屋市	東海
39	（特活）アレルギー支援ネットワーク	愛知県岡崎市	東海
40	三重県立相可高等学校食物調理科	三重県多気郡	近畿
41	答志島活性化21委員会	三重県鳥羽市	近畿
42	松阪商業高校　空き店舗活用事業「あきない屋」	三重県松阪市	近畿
43	地域発展研究センター	京都府京都市	近畿
44	関西木造住文化研究会	京都府京都市	近畿
45	コミュニティスペースPECO実行委員会	京都府京都市	近畿
46	紙芝居劇むすび	大阪府大阪市	近畿
47	阪神大震災を記録しつづける会	兵庫県明石市	近畿
48	地域探検隊	兵庫県加古郡	近畿
49	ガテン@工藤組	兵庫県明石市	近畿
50	奈良地域生活支援ネットワーク	奈良県奈良市	近畿
51	色川「百姓養成塾」をつくる会	和歌山県那智郡	近畿
52	（特活）だんだん　共同作業所　さくらの家	島根県隠岐郡	中国
53	（特活）おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズ	岡山県岡山市	中国
54	港町ネットワーク・瀬戸内	広島県尾道市	中国
55	（特活）鞆まちづくり工房	広島県福山市	中国
56	（特活）HPS国際ボランティア　ヤングチーム	広島県広島市	中国
57	金魚島インターネットTV	山口県大島郡	中国
58	（特活）ハイ・フォロー・ステーション	香川県高松市	四国
59	あかね会	愛媛県西条市	四国
60	（特活）NPO砂浜美術館	高知県幡多郡	四国
61	（特活）まあるい心　ちゃれんじどの応援団	高知県高知市	四国
62	高知農業高等学校	高知県南国市	四国
63	（特活）ソーシャルサポート相談室内　中高生自主学習グループ“ぐんぐん”	福岡県福岡市	九州
64	市立　飯塚高校	福岡県田川市	九州
65	武寧王交流唐津市実行委員会	佐賀県唐津市	九州
66	アイランドツーリズム推進協議会	熊本県天草市	九州
67	希少植物を守る会	宮崎県宮崎市	九州
68	樟南第二高等学校	鹿児島県大島郡	九州
69	（特活）かごしま青少年自立センター	鹿児島県指宿市	九州
70	（特活）トカラ・インターフェイス	鹿児島県十島村	九州
71	八重山食文化研究会	沖縄県石垣市	沖縄
72	（特活）マーズ	沖縄県宮古島市	沖縄
73	スタジオ解放区	沖縄県沖縄市	沖縄

（2007年4月末現在）

おじゃまします！―PO（プログラムオフィサー）訪問記

「あきない屋」をお訪ねしました

残暑もひときわきびしいある日の午後、三重県立松阪商業高等学校による「あきない屋」を訪問してきました。これは、JR・近鉄の松阪駅前の商店街「ベルタウン」の中にある、同高校経営による実習店舗です。二〇〇六年度「ユース助成」による活動について、高校生のみなさん、そして先生を含めた協力者の方たちが、どのような活動をしていらっしゃるのか……楽しいこと、苦労されていることなどについてうかがえればと思い、お訪ねしました。

夏休み中のこの日には、七名の生徒さん、責任者の田邉見真先生（同校教諭）、中澤典郎先生（同）が取材に応じてくれました。他に、「あきない屋」設立以来のサポーターである川口正人さん（松阪商工会議所）をご紹介いただきました。

ベルタウン一階奥に位置する「あきない屋」を活動拠点に、市民を対象としたパソコン教室、簿記教室（無料）の開催、商店街活動、祭りに際しての出店協力といった多彩な取り組みをしています。なかでもオリジナル商品の開発と販売が主な活動です。三重県の高等学校では初となる商標登録『松阪街っ子〜牛すじ一番〜』（レトルト）の他、携帯ストラップ、Tシャツ、モロヘイヤ豆腐、モロヘイヤうどんなど、さまざまな商品開発と販売の実績があるとのこと。豆腐は店頭販売の他、自転車を使っての移動販売もしています。今回の助成金により、新たに冷凍の「牛すじコロッケ」、そして「香り米」の開発に取り組んでいるそうです。

夕方になると地域の人が訪れて豆腐などを買っていく

さて、「あきない屋」の中では、ちょうどパソコン教室が開催されていました。参加者はご高齢の方が多かったのですが、なかなか好評です。「息子に聞いても教えてはくれるけど、つい喧嘩になってしまうのでね」とおっしゃる男性。この教室でパソコンを覚えたいと熱心に受講していました。また、講師を務める生徒さんにとっては、自ら学習してきた成果についての「腕試し」のいい機会なのでしょう。

帰りにモロヘイヤ豆腐、牛すじなどの商品を購入する受講者が少なからずいました。たぶん「パソコンの先生」への御礼の気持ちからだと思います。当日は、三年生が講師を務めていましたが、脇で必死にメモを取る一年生の姿がありました。なんでも、翌日の講習は、一年生が講師をつとめるそうです。なるほど、切実な様子が伝わってきましたね。

商工会議所の川口さんによれば、この商店ビル「ベルタウン」は、現在でこそ空き店舗が目立つものの、開設当初はずいぶん人の往来もあり賑わっていたそうです。「松阪牛」で全国に有名な松阪は三重県中央部の中心都市。地元出身の有名人には、蒲生氏郷、本居宣長、梶井基次郎、小津安二郎などがいます。市街地にはもちろん記念館などの施設もありますが、観光客を商店街に呼び寄せるまでには至っていないといいます。

街頭販売をするにしても（平日の昼間だったこともあるのでしょうが）とにかく人がいません。やはり、教育委員会、社会福祉協議会、もしくは卒業生への販売が、最後は頼りとはなってしまうそうですが、とにかく「声を出して街頭販売」させることも教育の一環と田邉先生はいいます。

街頭で、強い日差しを避けながら、懸命に販売に携わっていた大原さん（三年生）に、少し聞いてみました。

活動への参加のきっかけは、友人からの誘いだったそうです。以前はバドミントンの選手でしたが、ひじを痛めてしまったのです。街頭販売、店頭販売とも大声を出さないことには、商売にならない。最初は恥ずかしかったけれども、だんだん慣れて人見知りしなくなりました。この販売経験が「これからの人生に役立つと思います」と殊勝に話していました。現在「あきない屋」の活動メンバーには二年生がいないので、来春からは現在の一年生が中心となってやっていかざるをえないことが、大原さん、先輩として少し気になるようです。

みなさんのいきいきした活動ぶりが、とても印象的でした。無理矢理やらされているという感じではなく、楽しいからやっている。でなければ、炎天下で街頭販売などやれませんよね。

（トヨタ財団シニアプログラムオフィサー）田中恭一

「あきない屋」

BOOKS

「活動記録の出版」の助成を受けて刊行された書籍を中心に、話題の本をご紹介します。

01 いのちの海 大手の浜

――エコミュージアムを目指して
大手の浜なぎさの会編

発行　リーブル出版　2007年8月
定価　本体152円＋税

サンゴや熱帯魚が生きる海。高知市夜須町「大手の浜」海岸。この大手の浜にマリーナの建設計画が持ち上がったのは、1987年3月。1991年、建設に反対する市民が集まり「大手の浜なぎさの会」が結成された。その後、なぎさの会が中心となった地道な調査と粘り強い運動によりマリーナ建設計画は中止されることとなった。

本書は、「大手の浜なぎさの会」20年の記録。内容は、大きく2つにわけられる。前半は、専門家による学術的価値の報告。後半は、建設計画反対の意見書、一帯をエコミュージアムとして位置づけ環境学習の場として活用する提案書などなぎさの会の運動の記録。運動の記録からは、日本の開発や環境政策の抱える課題が浮き彫りとなってくる。

「大手の浜なぎさの会」の活動は続いている。2004年には、県、町、住民、専門家の参加による「大手の浜・懇話会」の立ち上げが実現した。そこにある海をそのままの姿で未来に托したいと願う人々の想いが地域の中で少しずつ共感を得て広がっている。

同じ想いで活動を続ける全国の人々に勇気を与える一冊である。

02 コミュニティ・カフェと市民育ち

――あなたにもできる地域の縁側づくり
陣内雄次・荻野夏子・田村大作 著

発行　萌文社　2007年9月
定価　2000円（本体1905円＋税）

宇都宮大学前の空き店舗に、試行錯誤の末にコミュニティ・カフェ〈ソノヨコ〉がオープンしたのは2005年1月のことだった。文字どおりゼロからの出発。当初は学生中心の店を構想したが、現実的な制約にも鍛えられて、コンセプトは「市民による市民のためのコミュニティ・ビジネス支援施設」へと高まっていった。現在、7組の日替わりシェフたちが自分の思いを形にして、健康と環境に配慮したロハスな料理や菓子を提供する。カウンター6席だけの小さな空間は、地域の人々にとってくつろぎの場となっている。

著者たちは〈ソノヨコ〉の立ち上げに尽力し、いまもその発展に知恵をしぼる「とちぎ市民まちづくり研究所」のメンバー。読んでいると「おもしろそうだから行ってみよう」という思いに誘われる。

とはいえ、共同でカフェを運営するには覚悟と工夫が必要だ。しかも経営者は素人ばかり。課題は金銭面ばかりとは限らない。どうすれば続けていけるのか？　本書に収められた切実な体験談と達意の文章にのせられて（?）「コミュニティ・カフェをやってみたい」という人たちが全国に増殖し、成功することを祈ってやまない。

03 移住連ブックレット3 講座　外国人の医療と福祉

NGOの実践事例に学ぶ　外国人医療・生活ネットワーク編

発行　移住労働者と連帯する全国ネットワーク　2006年12月
発売　現代人文社・大学図書
定価　本体120円＋税

医療ソーシャルワーカー（MSW）のために開催された外国人医療講座の記録をまとめたもの。

日本に暮らす外国人はさまざまな困難を抱えている。オーバーステイ、DV、人身売買、進まぬ難民受け入れ。こうした状況にある外国人がいったん病気になると、コミュニケーションの問題や高額な医療費など、いやが上にも苦しい立場に追い込まれてしまう。彼らの生きる権利を守るために、援助者はどのようなことができるのか。制度利用にあたっての注意点と資料をコンパクトに凝縮した一冊で、この分野にあまりなじみのない読者にとっても参考になる。

04 コーポラティブハウスのつくり方

知りたい　住みたい　つくりたい
特定非営利法人　都市住宅とまちづくり研究会編

発行　清文社　2006年5月
定価　本体180円＋税

東京の中心・神田を本拠とする略称「としまち研」が進める地権者参加型のコーポラティブハウス事業を紹介し、個性ある住まいづくりを応援するための本。

建物の老朽化に悩む地権者の声をくみあげ、共同建て替えを実現する手順が順を追って具体的に記されている。ことに事業主体となる建設組合の設立方法についての記述は詳しい。こうした試みが成功するためには、住人ひとりひとりが建物管理に関心をもち、地域との交流にも参加することが大切。新しい住民たちとともに取り組むコミュニティ再生事業の今後に期待したい。

地域ニュース

自殺を防ぐため「つながり」を取り戻せ

〜『いのち支える地域の電話帳』プロジェクト〜

NPO法人　自殺対策支援センター　ライフリンク
代表　清水 康之

去る七月一日、東京で自殺防止と遺族対策を呼びかける官民合同シンポジウム『自殺を「語ることのできる死」へ〜自殺対策新時代』が開催され、六〇〇人の参加者が集まりました。同シンポジウムを皮切りに、自死遺族支援全国キャラバンが日本各地で展開されています。これらの実行委員長を務めているライフリンク代表・清水康之さんから、連動するトヨタ財団助成プロジェクト『いのち支える地域の電話帳』についてご寄稿いただきました。

（事務局）

「つながり」という言葉は、いまや時代のキーワードになりつつあります。今年版の国民生活白書の表題は「つながりが築く豊かな国民生活」。私たちが日々取り組んでいる自殺対策の分野でも、例えば弁護士と精神科医、NPOなどといった「相談窓口同士のつながり」が自殺を防ぐための鍵になると言われています。

しかし、「つながり」は必要に応じて、自然発生的に生まれるものではありません。むしろ現代社会においては、物事はより細分化された領域へ、より専門分野へ、より縦割りへと、「つながり」が切り刻まれていく方向に力が働いています。必要とされていても、「つながり」は社会から失われていっているのです。

『いのち支える地域の電話帳』プロジェクトは、そうした社会の力学に逆らって、自殺対策の関係者間に「つながり」を取り戻そうという試みです。心の悩みや多重債務、いじめや過労など、自殺の要因となっている諸問題の相談に応じている個人や団体の連絡先を一冊の『電話帳』にまとめて、相談員それぞれが「どういうときに、どこの誰とつながればいいのか」を一目で判断できるようにすることで、関係者間の「つながり」作りを促進させようというわけです。

この9年間、日本の自殺者は毎年3万人を超えており、その中には「必要な情報を入手できていれば自殺を避けられたであろう人たち」が数多く含まれてきました。これからは、そうした人たちの「いのち」をもしっかりと守れるように、地域のセーフティーネットの網をより大きく、また網の目をより細かくしていかなければなりません。そのためにも、できるだけたくさんの分野の関係者たちをつなげられるような、魅力ある『いのち支える地域の電話帳』を作り上げていきたいと考えています。